

日本語の混淆言語説

長田 俊樹

はじめに

なぜ表題の小論を書こうとおもいたったのか。その経緯からのおこう。

じつは、筆者は井波班「文学における越境と混淆」という共同研究会のさいしよからのメンバーではない。二〇〇一年三月をもって、日文研の助手を辞し、京都造形芸術大学に転勤する。日文研といっさいかわりを捨てて、そのまま辞去するのは心惜しい。そこで、共同研究会のメンバーにしてみらおう。そんなたくらみのもと、井波さんに声をかけたところ、内心はともかく、こころよくむかえられる。ただし、そのときに、ひとこと釘をさされる。「長田君、共同研究会に参加するのはええけど、ちゃんと発表しいや」と。そこで、二〇〇二年七月に、「オリエンタリズムVSオリエンタル・ルネッ

サンス：一九世紀ヨーロッパにおけるインド再発見―金・好奇心・自負心―」と題して発表したのである。この発表はそのときちょうど執筆中だった『新インド学』（角川叢書として二〇〇二年一月に出版）の宣伝をかねて、一生懸命あつめた文献を披露しながら、得意げに発表した。そう記憶している。共同研究会の報告書というもの、ほんらいであれば、その発表にもとづいて、まとめるのが一般的である。ところが、それを断念することにした。

それはなぜか。それは、筆者の発表とおなじ日の発表者に圧倒されたからである。その発表者とはだれか。それは池内紀さんである。当日、池内さんは筆者の発表の直後に研究発表する。その池内さんのカフカをめぐる発表に圧倒され、その直前におこなった筆者の発表はまったく精彩を欠いてしまった。そんな印象しか残っていない。さらに、それに追い打ちをかけるように、発表後のコンパでは、池内さんの三大原則を聞かされる。その三大原則とは、若き日の池内

さんが神戸大学に赴任したさいに、たてたものだという。それは、「非常勤講師をしない。教科書は書かない。現地情報通の友達はやらない」(このように覚えているが、池内さん、もしまちがってればご訂正ください) というものである。あちこちで非常勤講師をし、あわよくば教科書でも書いて一儲けをたくらみ、耳寄りな情報にいつも聞き耳をたてている。そんな調子のわたしには、とても池内さんようにはなれないなあ。そんな感想とともに、つぎのようなおもいが頭をつぎつぎとよぎった。ドイツ文学者の前で、ドイツロマン主義者とインド・ルネッサンスの関係を得意げに語った自分が恥ずかしい。釈迦に説法とはこのことだ。池内さんの自分を律したその態度と比して、いかに自分は軽い人間なのか。こんな受け売りで、有頂天になっているとは。その結果、共同研究会の報告書では、発表とことなったテーマでまとめようと、そう決意する。

だが、そう決意したものの、そのつぎのテーマがなかなかみつからない。そんなときである。二〇〇一年四月から二〇〇二年三月まで、筆者が幹事をつとめた日文研の共同研究会『日本語系統論の現在』の報告書づくりにおわれる。そのとき、「混淆」つながりできなかったのが小論のテーマである。さいわい、井波班報告書では題名も「文学」から「表現」になっている。やや強引さはいないものの、小論で「表現における越境と混淆」というテーマを論じることができるしてもらおう。というわけで、共同研究会の報告書に

いれてもらうことにした。この場を借りて、井波班長の偉大なる寛容に感謝したい。

一、日本語起源論と日本語系統論

まず、はじめに日本語起源論と日本語系統論と二つならべてみる。日本語の起源はなにか。日本語の系統はどれか。このような問いに代表される両者は、けっきよくのところおなじものではないか。そうおもわれる人が圧倒的であろう。じじつ、筆者が編集にかかわった日英両語による論文集『日本語系統論の現在』の英文タイトルは、*Perspectives on the Origins of the Japanese Language* だ。この英語を直訳すれば、『日本語の起源にかんする研究展望』とでも訳されるはずなのに、日本語では『日本語系統論の現在』となっている。これこそ、「起源論」と「系統論」がちがわない。その証拠を長田じしんが提示しているようなものだ。そう指摘をうけるかもしれない。しかし、英語では、日本語起源論と日本語系統論とのちがいをうまく表現できない。とくに日本語系統論にあたる英語をさがすのはなかなかむずかしい。Discussion on the genetic relationships between Japanese and other languages としても、Japanese genealogical studies としても、日本語系統論からくる簡潔で研究内容がはっきりとうかぶ日本語とくらべて、これらの英文ではしっくりいかない。後者な

どは英語の母語話者にきいてみないとわからないが、日本の系図研究の意味になるのではなからうか。英語ではうまく区別できない両者だが、すくなくとも日本の言語学者や国語学者はあきらかに両者を区別している。

では、その相違点はどこにあるのか。ここにおあつらえ向きの方に登場していただく。国語学者の馬淵和夫である。馬淵はその相違点を、つぎのように正直にのべている。

日本語の歴史をさかのぼっていくと、一体どこへいきつくのか。

逆に、日本語の歴史をかこうとするとどこからはじめたらよいのか。また別のみかたからすれば、どこからがいわゆる国語学の領域なのか、ということは、つねに国語学者のあたまをなやませる。

しかしかんがえてみるに、だれも国語学の研究範囲はこれだけだと限定したものはいないし、そのことをおおまじめに論じたというはなしもきかない。逆に、西欧の言語研究の様相からして、国語学と言語学を分離していることがおかしいという議論はよくある。しかし、ここでは国語学という、いわば日本の学問の一分野として成立してきたその特殊性と現状にたつて、やはりおのずからこのふたつの学問は分離してしかるべきだというたちばにたつことにする。そのたちばにたつてみると、主として国語文献をあつかって論じるのは国語学の範囲であり、周辺の諸言語との関係から文献以前の日本

語を論じるのは言語学の範囲である、というような区分が暗黙のうちにあるようにおもわれる。たしかにおおくの国語学者にとって、日本語以外の言語に通曉し、かつその文献を読んでそこから情報を使うという作業は億劫であるし、とてもまひまのかかることであり、ひとつの別の学問領域としたところである。また、いわゆる言語学者の方ではその逆で、日本の文献の面倒くささとその閉鎖的(?)な思考方法には閉口で、もつと世界の学界でものがいえるようなものこそ真の学問である、とおもっていられるのかもしれない。しかしとにかく、この、文献以前の日本語というものは、どちらのがわからぬものがいえる領域であり、そして実はその結果がおたがいに補完しなければならぬものではない。つまり、国語学者は、上代日本語の形態からして、これだけの条件を充足してくれなくては日本語の祖先とはみとめられないという条件をだし、言語学者は、まさにその条件はいろいろ修正しなければならぬが、その修正した結果はこの言語にかなうのだ、と提示してくれば、ここでうまく補完作業ができあがるのだが、実際はどちらもいまだしいとおうのが現状のようである。そのひとつの理由として、どちらのかわでもその面の研究が芳おおくして功すくなきため、研究が遅々としてすすまないことがあるのであろう。

また、もうひとつの理由として、国語学者と言語学者の目的意識のちがいがあのではないかとおもう。言語学者はおおくの言語の

系統を問題にする。つまり、そのことが比較言語学や歴史言語学の課題のひとつであるからである。日本語に対するこのようなアプローチのしかたは、明治以来の西欧言語学および日本の言語学者の業績によくあらわれている。しかし国語学者は日本語がどのように成立したかということに興味をもつ。勿論日本語の成立をかんがえるばあい、系統論的研究の方法をとりいれることは有効であるが、系統を確立することを目的とはしない。極端なことをいえば、日本語が成立した過程があきらかなければいいので、日本語がどの系統にながっていくかということとはかならずしも必要ではないし、あるいはまた、混成言語というものがあるのかという議論も退屈である。だからおおきくまとめれば、言語学者は系統論を志向し、国語学者は成立論にかたむくということはあるようである。

(馬淵一九八五・三四—三六)

長々と引用したのは、これほど国語学者と言語学者との境界をあけすけに指摘した文章はめずらしいからである。「国語学者にとつて、日本語以外の言語に通曉し、かつその文献を読んでそこから情報をとるといふ作業は億劫である」と心情を吐露し、いっぽうでは、「いわゆる言語学者の方ではその逆で、日本の文献の面倒くささとその閉鎖的(?)な思考方法には閉口で、もつと世界の学界でものがいえるようなものこそ真の学問である」と、いくぶん肩を持ちな

がらも、「いわゆる」をつけることをわすれないで、日本語の知識に欠ける言語学者を印象づけている。また、「どちらのがわでもその面の研究が芳おおくして功すくなきため、研究が遅々としてすまない」というのは、当事者のいつわらざるおもいであろう。そして「言語学者は系統論を志向し、国語学者は成立論にかたむく」と結論づけている。

もういちど確認しておくが、馬淵は国語学者である。その馬淵は言語学者の日本語系統論を牽制しながら、はつきりとうこう宣言している。「日本語が成立した過程があきらかなければいいので、日本語がどの系統にながっていくかということとはかならずしも必要ではないし、あるいはまた、混成言語というものがあるのかというのか」という議論も退屈である」と。この発言が筆者にはいちばん印象深い。ここにてでくる「混成言語」というものが、小論のテーマである「混成言語」のことである。その議論はあとでするとして、この馬淵の発言をもとに、日本語起源論と日本語系統論との相違について、整理しておこう。

馬淵は「系統論」と「成立論」を区別している。そして、起源論と銘打ったものも、よく吟味すると「系統論」と「成立論」に二分できるとみている。この馬淵の指摘はあながちまちがいではない。そう筆者もおもう。しかし、つぎの二点については馬淵も気がついていないのではなからうか。それは、系統論がさいしよにあつて、

成立論があとから生じたのではないということだ。むしろ、「成立論」にかたむきがちな日本語起源論を言語学者の手に戻さんがために、声高々と「系統論」を打立てようとした言語学者がいた。そのことをここでぜひ確認しておきたい。その言語学者とはだれか。それが『日本語の系統』（岩波書店。後に岩波文庫として出版）で知られる服部四郎である。かれこそが日本語起源論を、高度に言語学的色彩をつよめた日本語系統論に転換させた張本人である。

そしてもう一点は、日本語起源論が歴史的な縦軸を無視して、起源言語や起源地を横軸であるアジア各地にもとめようとした点もわすれてはならない。とおくは安田徳太郎の「日本語Ⅱレプチャ語起源説」、ちかくは記憶に新しい大野晋の「日本語Ⅱタミル語起源説」をみても、日本語の祖先そのものがレプチャ語やタミル語となっている。これは言語学の常識をくつがえすものである。その常識とは言語が変化するという大原則である。レプチャ語やタミル語が日本語と系統関係を有するというのであれば、すくなくともその仮説自体、言語学者の常識で理解できるが、レプチャ語やタミル語が日本語の起源であるといわれると、レプチャ語やタミル語について、すでに前者はチベット・ビルマ語族に属し、後者はドラヴィダ語族に属するという言語学的事実があきらかになっている以上、日本語はチベット・ビルマ語族に属するとか、日本語はドラヴィダ語族に属すると提示しないかぎり、言語学者は納得しない。そうした言語学

的な常識が通用しない議論はやめる。そう決意して、服部四郎は「起源論」という問題のたて方を避け、「系統論」という問題のたて方に固執したのではないか。そう容易に推測できる。

言語学以外の要素が入りやすい「起源論」を、言語学主導の「系統論」にする。ここに、「日本語起源論」と「日本語系統論」との差があきらかとなる。じじつ、服部は「日本語系統論」は言語学者のものであるとかんがえていたようで、それはつぎのような発言をみれば、はっきりとわかる。

日本語の系統を研究するのに、日本人の起源、言語学以外の日本文化の起源などが明かになっていくと、考察が楽になり有利に展開するだろう。この意味で、大野さんが人類学・考古学・民族学などの勉強をされたのは正しい。しかしながら、いやしくも事言語に関する限りは、最終的・決定的発言権は言語学にある。他の分野の諸研究は参考となるに過ぎない。他の分野における現象のつじつまを合わせるために言語の分野で無理をしてはならない。大野さんの著書を見て行くと、全般的に見て、言語以外のことにやや目を奪われたかのような印象を受ける。(服部一九五九：二三四)

この発言は大野晋『日本語の起源(旧版)』(岩波新書)が出版されたときのものである。「いやしくも事言語に関する限りは、最終

的・決定的發言権は言語学にある」とはおそろしい自信である。これを言語学至上主義とよんでもおかしくなからう。こうして日本語系統論は言語学者の専売特許となったかにみえた。ところが、この服部の言語学至上主義にもおもわぬ落とし穴があった。それはインド・ヨーロッパ語族をモデルとする学説にも、ほころびがあったからである。小論ではその点をあきらかにしようとおもう。

二、印欧比較言語学と日本語系統論への適用

服部は「日本語起源論」を言語学者の手にとりかえすために、「日本語系統論」を推進していく。その系統論がよつてたつところは、インド・ヨーロッパ語族を確立させていった印欧比較言語学である。インドの古典サンスクリットと、ヨーロッパの古典、ラテン語、ギリシャ語が、いまはもうなくなった共通の源から発する。そうはじめて発言したのはウイリアム・ジョーンズで、一七八六年のことである。このことは言語学の教科書に書かれている。それから約百年かけて、インド・ヨーロッパ語族は仮説ではなく、コンセンサスのえられた事実として、認知されることになる。その根拠となつているのが規則正しい音韻対応である。一九世紀末には、「音法則に例外なし」とまでいわれるようになる。また、二〇世紀になつてから、新しく発掘・解説によつて発見されたヒッタイト語は、イ

ンド・ヨーロッパ語族に属することがあきらかになつただけでなく、比較言語学が推定する音韻変化を証明する言語であつたことまでがわかるようになり、印欧比較言語学の正当性をいっそうふかく認識されることとなる。

服部四郎は比較言語学の方法論を十二分に理解したうえで、厳密に網羅的な研究を自分に課し、また学生にも要求した。もちろん、その方法論はインド・ヨーロッパ語族という格好のモデルを念頭においたものである。ところが、そこに思わぬ落とし穴があつた。それが言語年代学である。言語年代学とは、なにか。『言語学大辞典』（三省堂）によると、こう説明されている。

語彙統計学ともいう。二言語が共通基語から分裂し経過した年代を算定する方法。アメリカのスワデシュが、考古学で用いる放射性炭素（ C^{14} ）の崩壊を測定して遺物の年代を算出方法に着目して、一九五〇年代に考案した。特に、その前提となつたのは、あらゆる言語において基礎語彙はほぼ同じ速度で変化するという発見があつた。（亀井・河野・千野編一九九六・四六九）

具体的に基礎語彙をあげると煩雑になるので省略するが、とにかく年代を算出する方法として画期的なものと歓迎されたのである。服部はこの言語年代学を日本語系統論に導入し、日本語と隣接する

言語の「水深測量」をこころみる。それによると、たとえば日本語と朝鮮語の関係は「両言語が親族関係を有するとしても非常に古く分裂したものであること(四〇〇〇年まえ以後に分裂したものであり得ないこと)、を物語るものと解釈することは、決して不適当ではなからう」(服部一九五九・二〇八)と指摘している。しかし、この年代がはたして有効だといえるのか。そういった疑問はふるくからあったが、「事言語に関する限りは、最終的・決定的発言権は言語学にある」とする言語学至上主義の立場では、考古学が映し出す歴史事実とのずれなどは、服部にとっては問題とならなかったのである。

ところが、皮肉なことに、今日ではこの言語年代学はほぼ否定されている。たとえば、オーストラリア言語学界の雄、デイクソンはこうのべている。

スワデッシュは「系統」関係を明らかにする魔法の公式をみだした。文法や辞書を何一〇年も費やして編纂し、その上で体系的な対応関係を見つけ再建を試みるという必要はもはやなくなった。たぐさんの言語からそれぞれ特定の一〇〇、またはおそらく二〇〇の基礎語彙を集め、それらの基礎語彙同士で同系と思われる項目を調査し書き留め、比較しさえすればよい。公式はそこで、言語同士の関係(語彙統計学)や、それらに共通の祖語の古さ(言語年代学)

を我々に提示する。……(中略)……

近道はどれもそうだが、この方法もうまくは行かなかった。それは間違った仮定—語彙項目のみから系統関係を推測できるということ、すべての言語の語彙項目がいつも一定の割合で入れ替わるということ、基礎語彙がいつも非基礎語彙と異なった使われ方をするということ—に基づいていた。語彙統計学が決定的に信用を落とすまで、この一〇〇語のリストを用いた比較は、一部の人たちに数年にわたって熱狂と歓喜の時代をもたらしたものだ。

(デイクソン二〇〇一・五一—五二)

この言語年代学の否定が意味することはこのほかおおい。つまり、インド・ヨーロッパ語族による比較方法の確立がゆらいだわけではないが、インド・ヨーロッパ語族をモデルとする年代測定法が他の言語にけつしてあてはまらないという事実が、白日の下にさらされたのである。となると、世界中のすべての言語がインド・ヨーロッパ語族と同様の言語史を歩んできたかどうかということも、とうぜん問題となる。

三、混淆言語説と日本語混淆言語説

そこで登場するのが混淆言語説である。まず、従来のインド・ヨー

ロツバ語族に基づく比較言語学の立場では、この混淆説をどうみてきたのか。ここでもまた、服部四郎の説明をひいておこう。

或言語Aが外国語Bの著しい影響を受け、音韻・文法・語彙のあらゆる面で、A・Bどちらのものともつかに程度に変化した時に、その言語Aが外国語Bの影響から離れて、独自の発達をとげるようになることが起れば、その言語は「混合語」であつてA・B両方の系統に属すると言わなければならないだろう。ところが、実際には、その程度の外国語の影響は受けずにAの系統と認めざるを得ないか、或いは、もとの言語の特徴はいくぶん残しながらも外国語の言語的核心部をとつてBの系統となつたと認められるか、のいずれかであるのが普通である。(服部一九五九：二五八)

ここで服部は「混合語」がじつさいにはありえないことを指摘し、やんわりと否定している。また、服部は混淆言語説を否定するだけではなく、印欧比較言語学が堅持する言語の分化と、正反対の現象である言語の統一にかんしても、つぎのようにのべて、否定している。

近時ソヴィエト言語学が紹介されて、言語は多元から統一へ向かうものだというその学説が、印欧言語学の、一つの祖語から多くの

言語が分化したという学説に対立するもののように考えられ、それが一面の真理を有するように説く向きもある。しかし、多くの方言が統一されて一つの共通語となつたり(たとえばギリシヤ語のコイナー)、或民族が隣接の民族の言語を話すようになるような現象は、従来の言語学でもよく知られていた事で、何も事新しいことではない。同時に我々は、印欧諸言語の「類似点」が同じ祖語(完全に同一の祖語という意味ではない。その中には方言差異もあつたことは認められる)に遡るといふ学説を依然として信じる者である。何となれば、その学説は、現在印欧系の諸言語を話しつつある諸民族がもと同一の言語を話していたことを意味するものでは決してないから。それらの諸民族はもと色々の言語を話していたであらう。しかし、それらは、いずれも同じ系統の言語を話すようになったのである。現在のこれらの諸民族の言語は、やはり同一の祖語に遡ると考える時に、始めていろいろの言語的事実を合理的に説明することができるのである。(服部一九五九：五一六)

このふたつの発言を注意深く検証してみると、言語年代学ほどには決定的なまちがいをおかしてはいない。混淆語はじつさいにはないといひ、けつしてありえないとは断定してはいない。また、「印欧諸言語の『類似点』が同じ祖語に遡るといふ学説を依然として信じる者である」という点も、印欧諸言語にかんしていえば、いまでも

有効である。しかし、日本語の系統をかんがえるうえで、印欧諸語とおなじようにかんがえればいいのかどうかについては、はっきりと言及していない。印欧比較言語学の方法論を堅持することを、あんに示唆しているにすぎない。

服部の引用のなかに、「近時ソヴィエト言語学が紹介されて」とあるが、日本語の混淆言語説をはじめ提唱したのは、ソヴィエトの言語学者ポリワノフである。そのポリワノフの学説を紹介しながら、日本語混淆説を樹立したのが村山七郎である。その村山は服部がないとみなした混淆言語がじつさいに存在することを力説する。その混淆言語がコマンドル諸島の銅島の言語である。村山はこゝろ指摘する。

アレウト人の人口の一〇%ほどのロシア人の言語が百年間にわたってアレウト語と接触した結果、二つの言語（アレウト語、ロシア語）の形態をそなえた混合言語、メイエやブルームフィールドがどこにもこれまで見出し出されないとしていた混合言語、たいていの言語学教科書にその存在が証明されていないと書いてある混合言語の存在が証明されたのです。（村山・大林一九七三：一一―一二）

メイエはフランスの言語学者で、ブルームフィールドはアメリカの言語学者である。ふたりとも、二〇世紀の前半にはひじょうに影

響力のあった言語学者だ。「ユリイカ」と叫んだアルキメデスのごとく、「混合言語」を発見した村山の雄叫びが聞こえそうである。この銅島の言語が混淆言語と認められれば、混淆言語は実際に存在しないという服部の発言があやうくなる。

じつは、一九九〇年代以降、混淆語研究はブームをむかえたといっているほどである。この銅島の言語をはじめ、アフリカのマア語やアメリカ・カナダのミチフ語などが混淆言語とみなされている。いまや混淆言語は存在しないなどという人は、まったく言語学の勉強をやめてしまった人か、他人の研究に関心をよせない人ぐらいではなからうか。混淆言語説に関心のない人のために、混淆言語に関する文献をあげておこう。混淆言語に関心をよせる口火を切った Baker & Mous (eds) (1994) をはじめ、二〇〇〇年以降だけでも Thomson (2000), Myers-Scott (2002), Winford (2003), Baker & Matras (eds) (2003) といずれも混淆言語をテーマとした本の出版が続いている。なお、なにももって混淆言語とするのか、といった高度に言語学的な議論があるが、そういった問題は小論ではあつかわない。小論では、混淆(言)語も混合(言)語もおなじとかがえていたきたい。言語学的な問題の詳細をしりたい方はいまあげた参考文献や長田(二〇〇三)を参照のこと。

欧米の言語学界の動向に目をくばっていた服部がもし生きていたとしたら、この状況を見て、はたしてどのような発言をしただろう

か。それでも混淆言語はないと断言するのか。それとも、混淆言語はたしかに存在するが、日本語は混淆言語ではないというのか。いずれにせよ、日本語混淆言語説は否定するのではないか。そんな気がする。というのも、以下の発言は混淆言語がみつかったぐらいではゆるぎそうにないからである。

日本語の系統を明らかにすることは極めて困難であるが、そうかといつて、日本語は他の諸言語と親族関係を有しないのだと断定することは、もちろんできない。また、日本語は混淆言語であるなどと断ずることも危険である。完全な意味での混淆言語は容易に成立し得ないであろう。たとえ語彙の圧倒的部分が外国語からの借用であっても、音韻体系と形態が固有のものである限り、その言語は混淆言語となつたと見ることができない。音韻体系と形態が二つの言語の混淆であるというような言語は、おそらく有り得ないであろう。

(服部一九五九・一九)

服部におおきな誤算があつたとしても、服部の偉大な業績はゆるがない。服部でなくとも、これほどまでに、混淆言語研究がさかんになるとだれが予想したであろうか。それよりもっとふしぎなことだが、混淆言語研究がさかんになつたいま、それに対応して、日本語混淆言語説が勢いを増したとはとてもおもえない。なぜだろう

か。それにはいくつかの理由が考えられる。

まず、長田(二〇〇三)でなんども繰り返し指摘したように、日本語系統論じたいがはやらなくなつてしまったことがあげられる。日本語系統論をもちあげてきた服部四郎や村山七郎、それに亀井孝など、戦後の言語学をひっぱつてきた人々はなくなり、最後に残つた大野晋もいまや八〇歳半ばである。また、日本語混淆言語説といいつつも、その混淆の実態がどういうものか、コンセンサスがあるわけではない。たとえば、大野晋は「日本語とタミル語起源説」の提唱者として、世間にはしれわたつているが、そのじつは日本語混淆言語説である。その混淆言語説をみると、①オーストロネシア語の段階、②タミル語受け入れの段階、③古代朝鮮語受け入れの段階、④漢語の受け入れの段階の四段階をへて、日本語が形成されたとみている(大野二〇〇〇・ix)。日本語混淆言語説を世間にひろめた村山七郎は、オーストロネシア語のうえにツングース語がかぶさつたとみるが、現在日本語混淆言語説を提唱する崎山は、基層言語(さいしよにひろがっていた言語)、上層言語(あとからひろがった支配者の言語)といったとらえ方をとらず、「垂直的な言語接触とそこで発生した言語変化が全体に波及する」(崎山一九九八・三九)という混淆をかんがえている。

しかし、いちばん重要なことはつぎのことである。たしかに混淆言語研究がさかんになつたことは事実だ。しかし、いまさかんにお

こなわれている混淆言語研究は、歴史的な研究ではない。いま混淆言語が生成されている。あるいは、ヨーロッパ人が植民地活動をおこなうようになって以後、記録が残っている範囲で、混淆言語が生じたことが確認できる。そうした混淆言語を記述したものがほとんどである。つまり、過去の時代に、混淆言語として、言語が生成されたという痕跡がいまの言語からわかるといったものは、いまのところ報告されていない。音韻・形態・統語論上からみて、この言語特徴がある場合は混淆言語の痕跡を残している。そういった定式化が将来されるかもしれないし、ぜひそう期待したいものだが、そういう傾向なり、一般化がない以上、混淆言語が存在することと、日本語の混淆言語説とは、ちよくせつ、結びつかないのである。

四、言語学とその他の学問分野

かつて、服部は「いやしくも事言語に関する限りは、最終的・決定的発言権は言語学にある」と断言してはばからなかった。しかし、その言語学でのコンセンサスにいたらなかったいま、どのように日本語系統論は論じられていくのか。一方では、あくまでも言語学の範囲で、従来の比較方法をこえる方法であり、他方では、言語学以外の方法を積極的に採用していく方法である。

前者の方法として、筆者が注目しているのが松本克己の研究であ

る。松本(二〇〇三)は従来の比較方法をこえるために、日本語にみられる言語特徴の地理的分布をプロットする。たとえば、流音(音声学ではエやイをこう呼んでいる)のタイプや形容詞が用言型か、体言型かといった特徴を類型的に分類し、その特徴を地図上にプロットする。すると、こうした言語特徴の分布にある傾向がみられるという。その共通の特徴を日本語とおおく共有する言語群が偏在することから、そのことと言語の歴史の変遷とが関連づけられるのではないかとみる。世界中の言語をプロットするのはなかなかむずかしいが、こうした言語特徴の類型論的研究が言語の歴史をあきらかにする道具になる日がくるかもしれない。そう期待している。

いっぽう、後者の方法は日本ではまだまだおこなわれていない。しかし、世界的にみると、アメリカの著名な言語学者グリーンバークがアメリカの先住民言語の分類に、人類遺伝学などの分類法を積極的に受け入れて、言語学に適用している。かれの提案する方法は多角比較とよばれている。多角比較とは言語の系統をかんがえるさいに、言語学以外の成果を積極的にとりいれる方法論である。多量比較ともメガロ比較ともいわれる。分類の規準は言語だけをみるのではなく、生物学的な分類や出自と対応する系図、文字体系の分類などを積極的に導入する。また、言語の比較因子には従来の音韻対応重視という方法をとらず、基礎語彙や文法標識を重視する。この方法論は遺伝学者に歓迎されたが、言語学者にはおおむね不興を買っ

た。それはなぜか。言語の系統関係に不可欠な音韻対応を無視しているからである。

さらにもうひとつ、言語学以外の成果を導入した歴史言語学がある。それはホモ・サピエンスの動きに合わせて、言語の分類を考察しようとするものである。この人たちの方法論はグリーンバーグと似ている。かれらは、もっぱら遠隔比較論者 (Long Ranger) とよばれている。言語の一元起源説 (Monogenesis) を視野にいれて、従来の語族をこえて、もつとおおきな分類をおこなっている。こちらにも言語学プロパーには不興である。

従来の比較方法をこえようとするところを紹介してきた。その紹介をとおしておもうのは、さいしよに引用した服部の「いやしくも事言語に関する限りは、最終的・決定的発言権は言語学にある」という発言である。じつは、言語学を越境して、遺伝学などの成果を積極的に導入してしまうと、それは言語学ではなくなってしまうのではないか。つまり、アフリカを出たホモ・サピエンスの移住・拡散をかんがえるときのおおきなわくぐみのなかで、言語は一つの因子としてしか存在しないことになってしまっているのではないか。そういう事実がつかされたのである。そのとき、服部のあの言葉を金科玉条のように高くかかげ、言語学のわくにとどまるのか。はたまた、言語学のわくぐみをかなぐり捨てて、遺伝学の僕 (しもべ) よろしく、人類史のパラダイムにあった言語史を構築するのか。その

判断は学問にもとづくものではなく、学術外要因によってのみ決定される。そんな気がする。幸か不幸か、日本では後者にパラダイムシフトをとげた人はいない。それだけ言語学という学問がまだまだ安泰なことをしめしているのか。はたまた、まだまだ遺伝学という学問が新しいパラダイムを提示できていないのか。あるいは、日本の特有現象かもしれないが、言語学と遺伝学といった理系と文系のおおきな壁がパラダイムシフトを不可能としているのかもしれない。

五、おわりに

筆者はすでに『日本語系統論の現在』を編集し、「なぜ日本語系統論ははやらなくなったのか」と題する論文をまとめた。それと小論とはかさなった部分があるが、なるべくテープレコーダーにはならないよう、気をつけたつもりだ。齢をかさねてくると、ほぼおなじ内容の論文を臆面もなく書くようになる。そんな人を見るたび、そんなふうにはなりたくないとおもってきた。そこで、言語学の境界線とその越境、混淆を意識して、前回とはちがった角度から小論をまとめたのだが、はたしてどうだろうか。

戦後、日本の言語学をリードしてきたのは、小論の主人公服部四郎だ。前回も指摘したように、服部は学生たちに専攻する言語をあたえ、網羅的にかつ厳密に研究することを要求した。そして、言語

学プロパーとしてはじめて、文化勲章を受賞する。言語学から越境することなく、また混濁もけつして容認しない。そういった態度ゆえに、文化勲章を受賞することとなる。現在の学問のあり方を象徴していると、いえるのではないだろうか。うらをかえせば、学問には越境や混濁はゆるされない。唯一の例外があるとしたら、文学や芸術であろう。この井波班の共同研究会が「文学における越境と混濁」だったことは偶然ではあるまい。

言語学からの越境はゆるさない。それは言語学の内部において、ちいさな分野にだけ、自分の守備範囲を限定されることは、いっそうにかまわないことを意味する。そのけつか、言語学にかぎらず、いまの学問分野はいかに狭く、細分化がすすんでしまったのか。たまた言語学会にいつて発表を聞くと、「〇〇語における△△の××について」と重箱のすみをついたような細分化されたものばかりだ。「専門は」と聞かれると、「日本語のハとガのちがいです」と平気でこたえ、「ガとノのちがいはどうですか」と質問受けると、「ノはわたしの専門じゃありません」という。そんなやりとりもめずらしくはない。そこには越境もなければ、混濁もない。かつての言語学界に君臨した服部のように、「いやしくも事言語に関する限りは、最終的・決定的発言権は言語学にある」などと豪語する強者がどれだけいるのか。言語学の境界設定と細分化。似ているようで、どこがちがう。小論を書きながら、そんな感想をもった。

こうした学問の細分化をみていると、言語の分化はただしいとおもってしまふ。しかしいっぽうで、言語が消滅し、英語など有力言語が政治的な力を借りて統合しつつある。そうした歴然とした事実がある。また、比較方法がインド・ヨーロッパ語族からうみだされたものなのに、その方法がすべての言語に普遍的にあてはまりそうにはない。かといって、混濁言語といった特別なケースをもって日本語の起源にあてはめようとするのは、いかにも無謀だ。分化と統合。普遍と特殊。これらは、一方の立場にたつと、もう一方の立場が自動的に消える。いわば二者択一の関係にある。ところが、現実の言語をみると、そのどちらもおこりうる。一昔前にはやったように、これらをアウフヘーベンしてジンテーゼに到達する。そんな戯言はたんなる言葉の遊びにすぎないのかもしれない。

結論は前回とやはりおなじものとならざるをえない。日本語の系統や起源といった問題が、たんなる思いこみや思いつきではなく、コンセンサスをもって語られる日はまだまだ来ない。そのことだけはまちがいあるまい。

参考文献

和文文献

大野 晋 (二〇〇〇) 『日本語の形成』岩波書店。

長田俊樹 (二〇〇三) 「なぜ日本語系統論ははやらなくなったのか」ポピン・

長田編 『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター。三

七三—四一七頁。

亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (一九九六) 『言語学大辞典 第六卷 術語

編』三省堂。

崎山 理 (一九九八) 「日本人の南方観と日本語系統論—言語混合論への新

展開に向けて—」吉田金彦編『ことばから人間を』昭和堂。二九—

四一頁。

ディクソン、R.M.W.。大角翠訳。(二〇〇一) 『言語の興亡』岩波新書。

服部四郎 (一九五九) 『日本語の系統』岩波書店。

松本克己 (二〇〇三) 「日本語の系統—類型地理論的考察—」ポピン・長田

編『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター。四一—

二九頁。

馬淵和夫 (一九八五) 「日本語の『系統論』もしくは『成立論』のために—

日本語の系統を考える会編『日本語の系統・基本論文集—』和泉

書院。三四—五九頁。

村山七郎・大林太良 (一九七三) 『日本語の起源』弘文堂。

欧文文献

Bakker, Peter and Maarten Mous (eds) (1994) *Mixed languages : 15 case studies*

in language intertwining. Amsterdam: Institute for Functional Research into

Language and Language Use.

Bakker, Peter and Yaron Matras (eds) (2003) *The Mixed Languages Debate*.

Berlin: Mouton de Gruyter.

McWhorter, John H. (ed) (2000) *Language change and language contact in*

Pidgins and Creoles. Amsterdam: John Benjamin.

Myers-Soton, Carol (2002) *Contact Linguistics: Bilingual Encounters and*

Grammatical Outcomes. Oxford: Oxford University Press.

Thomason, Sarah (2000) *Contact Languages: An Introduction*. Washington D.C.:

Georgetown University Press.

Winford, Donald (2003) *An Introduction to Contact Linguistics*. Oxford: Blackwell.